



Title	入門スペイン語教育における「音節」について
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学論集. 2000, 22, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

入門スペイン語教育における「音節」について

出口 厚 実

La sílaba y silabificación en los libros de texto del español para principiantes

por Atsumi DEGUCHI

El presente estudio tiene por objeto poner en tela de juicio el método estándar con el que se enseñan fundamentos de la pronunciación española a los alumnos que acaban de iniciarse en el aprendizaje del idioma. Se plantea la cuestión sobre si son realmente necesarios el concepto de “sílaba”, prácticas de silabificación y una serie de términos usuales tales como, *diptongo*, *triptongo*, *vocal fuerte*, *vocal débil*, etc., además de los llamados “consonantes dobles”, que a veces suponen una gran dificultad en aprendizaje por parte de los alumnos.

Se subraya la inconveniencia de presentar a los estudiantes las tradicionales reglas de acentuación basadas en las sílabas y en cambio se proponen unas nuevas más sencillas por las que se puede localizar correctamente la vocal acentuada de cada palabra. Se advierten también los aspectos teóricos que dan consistencia a la idea de que el nuevo repertorio de materiales didácticos propuesto por el autor supera al utilizado por los textos de común uso en este país, que tienen puntos flacos y cuestionables tanto desde el punto de vista didáctico como por la realidad fonética en la que se basan.

本稿の目的は、スペイン語入門教科書における「音節」とその周辺、特に二重子音、分節法、アクセント位置の教授法との関連を再検討し、基礎的な発音教育に新しい方式を提案することである

I. 現状と問題点

スペイン語入門用の初級文法教科書で一般に「音節」という言葉が早い時期に導入されている。表記法や各文字と音との関係を解説する部分でこの用語が使われるためである。必ずしも「音節」の概念の理解が学習開始の初期に必要なとか、特に音節を重視しなければならないという考え方に立たない教科書執筆者であっても、スペイン語のアクセント位置のルールを修得させるステップの1つとして、不可欠な、あるいは、どうしても頼らざるを得ない音声・音韻上の用語と見なすのが実状であるように思われる。

文字体系と発音法の教授は、ほとんどの場合に、次のような全体構成と指導順序で行われている。

(1) <文字と発音>

unit 0. アルファベット

unit 1. 母音、二重母音、三重母音 : 単語の例示

[強母音、弱母音、母音分立 (: 単語の例示)]

unit 2. a (単) 子音 : 単語の例示

b 二重子音 : 単語の例示

unit 3. 音節の分け方 : 単語の例示

unit 4. アクセント位置 : 単語の例示

教室で使用される初級テキストだけでなく、上のような教科内容と項目提示順序は、広く一般の文法解説書やスペイン語の入門参考書、会話ハンドブック、辞書における発音概要等にごく普通に見られるもので、我が国ではしっかりと根付いたスペイン語教育における発音法プレゼンテーションでの定石と見てよい。

例えば、最近の数年間に初版が出版された教科書18点¹⁾で確認してみたところ、例外なく、「音節の分け方」(unit 3) という項目を設けて、その後でアクセント位置を説明するという、音節をベースにしたアクセント規則が示されている。また unit 2. b 「二重子音」の配置順序について、これを unit 3 に含めるとか、多少の食い違いやその内容の濃淡に差は見られるが、アクセントの位置についての指導はこの<文字と発音>部分の最終段階で導入されるという点で全体に共通性が認められた。

二、三のテキストでは「音節」という用語が使用されていて、単語を音節切りにした分節結果も明示されるけれども、分節の方法や二重子音の明細に言及することを省略しているものも発見された。しかし全体として見れば、これらも (1) の基本方式から外れるものでないと言える。

なお、以上のことはここ数年の新傾向として固まってきたというよりは、これら以前の文法教科書・入門テキスト・学習参考書の類の記述の中でほぼ確立していた伝統を、そのまま受け継いだ結果と推定される。

以下、1.1 から 1.6. にかけて、ここで改めて提起したいと思う問題は、(1) の後半部分、すなわち unit 2b, 3,4 の必要性和その内容に関してのみである。従って、(1) の中身全般に関連して思い浮かぶ様々な問題点や検討事項、例えば、個々の音声の修得にどのような指導法がふさわしいか、発音記号の利用の是非とその種類や表記法などの諸問題については扱わない。

1.1. 二重子音

unit 2b では、「二重子音」と呼ばれる次の2子音連続の組み合わせが提示される。 ” ス페인語にはこのような子音が連続して並ぶことがある” という単なる事例の紹介ではなく、

学習者全員が暗記すべき、特殊な扱いを要求される子音グループとして導入されるのである。

(2) pl pr bl br cl cr gl gr fl fr tr dr

二重子音は一息に発音されて分断されない2つの子音の続きとされるが、その実質は、2子音の並びを2つの異なる音節に切り離すという原則を設けることから生じる副作用、いわば「音節への分割の例外」を便宜的にグループ化しているのに他ならない。言い換えれば、この12の音連続に特徴的な二重子音という調音上の、あるいは音響上の実質内容はない。それゆえ、音声学的には二重子音という概念は存在しないにも関わらず、あたかもそのような実体が背後にあるかのような用語をもって扱うのは誤解を招きやすい。

実際に一般音声学で二重子音なる用語はまれにしか用いられず、用いられたとしても長子音、あるいは重ね子音を指すはずで、音配列的な(従って音節分離の上で)非分割2子音を二重子音として名付けるこのような習慣は、スペイン語教育の枠をはずした共通用語の育成という観点からしても、混乱の種子を蒔くのではないかと心配される。

しかし、最も大きな教育上の問題は、学習者にとって、なぜこれらの12の子音連続のみが特別扱いをうけて、『二重子音』と見なされなければならないか、非常に理解しにくいということである。その動機付けがないため、これだけの組み合わせをすべて正確に暗記するのは難しい。

第1要素と第2要素のメンバーはそれぞれ音韻的な自然類のまとまりを成し、これらの12種のセットが生じることは十分根拠のあることである。つまり最大語頭許容子音連結そのものが自然な制約を受けて、スペイン語ではこのような姿を見せることは何ら奇異なことではないが、未だ、スペイン語の語形の音韻的特徴はおろかスペイン語の音にも全く馴染んでいない段階の学習者にこれを説くことは無意味だろう。たとえこのことを丁寧に解説したとしても調音の仕方に対する理解を深める助けには役立たないだろう。

実際に、学習者が、この二重子音の理解と修得にどの程度困難を覚えているかについての具体的な調査データが見つからないので、新たにスペイン語専攻2年次生に対して簡単な音節分離テストを実施し、たとえ部分的であるにせよ、推定して見ることにした²⁾。

母音-二重子音-母音の環境に12種類の二重子音を含んだ12語を提示し、単語を音節に分節するように指示した。アンケートの際には、特に二重子音の用語も用いず、またそれらの学習度を試す目的も明らかにせず実施した。これら12語の中の問題の箇所をすべて正確に分節できたのはわずか13.6% (44人中6名)の学生のみだった。また二重子音別に正答の比率を集計して、その平均値を取ると約67%であった。ただし、後者の比率結果を見て、被験者が二重子音の非分割性のある程度修得していると判断することは危険で、これよりも相当低いであろうと推測する根拠がある。

なぜなら、これらの子音の出現する単語環境によって、おそらく日本語の音節の区切りとの干渉も作用しているためなのか、12種類の子音連続の分割の仕方に非常に大きなバラツキが認められ、正解者の中でも『二重子音』であるから分離しなかったのではなく、単に他

の要素を考慮した直感的な判断がたまたま偶然の正解に結びついた可能性がかなり高い確率で含まれているはずだからである。

しかし、それでも入門スペイン語教育では、必ずといってよいほど、二重子音が言及される。それは、単語を音節の連鎖へ分節する際に必須とされるからで、また「音節への分割」は、アクセントの位置を知るためにどうしても必要だという要請があるためだと考えられる。しかし、本当にそうなのだろうかという点はじっくりと検証される必要がある。

1.2. 複文字

2個の子音をまとめて1字母にみなす「複文字」の取り扱い慣行が近年改められた。現在のところ、既刊の辞書などが、なお、ch, ll をアルファベットの1文字と扱っているために、すべてのテキスト類が複文字の記載を廃止したわけではない。アルファベット表の配列がどのようなものであれ、複文字 ch, ll, rr が1個の子音としての音価を持つことは、当然、それぞれの各個別子音の説明の際に触れられる。それとは別に、音節への分節との絡みで、特にこれらの2文字が1単位の子音として計算されることが、別途に再確認されるのが習わしである。この2回目の再確認は、本来、不要とも言えるものであるが、ただ分節規則を配慮して存在することを注記しておこう。

1.3. 音節及びアクセント

二重母音、三重母音そして二重子音などが説明された後、次の段階で音節が登場する。音節の概念が導入されるのは、単語として区切られた音声セグメントの並びをより小さいグループ単位へ分割して、いくつの単位から構成されているかを知るためだろう。そのようなより小さな単位がどれだけ単語に含まれているかを知る必要は確かにあると思う。そこまでは正しいが、その数がいくつであるかを確定するためには厳密な区切りの境界線を引かなければならないという結論を必ずしも導かない点に注意が必要である。

ほとんどの場合、教科書は「音節」とは何なのかの説明や定義を与えず、これを行うかどうか、またどのように規定するのかが専ら教師の判断と裁量に任されている。テキストの中では音節の切れ目、音節境界を決定する手順だけが説かれるのが常である。それに従って生じた分割の結果そのものが、その実体、つまり音節であるという解釈を勧めているのであろう。

音節への分け方は周知のやり方なので詳しくは見ない。(3) i), ii) 2つが実際に採用されている類型である：

(3) 分節

- i) 音節境界を発見し決定させる
 - 1. (強)母音が2つ続くと、別の音節に分かれる
 - 2. 母音間の2個以上の子音は、1個のみが後ろの母音につく
- ii) 音節の型を示して音節に分割させる

開音節 (子音) + 母音

閉音節 (子音) + 母音 + 子音

両者に本質的な差はなく、結果として、例えば以下のような分節を学習者が行うことが期待されている。

pa - ta - ta de - cla - rar a - prue - ba

その後、発音解説の最終段階でアクセントの位置に関する規則 (4) が登場する。

(4) アクセント位置の規則

1. 母音、-n, -s で終る語は後ろから2番目の音節
2. -n, -s 以外の子音で終わる語は最終音節
3. (例外的に／上記以外／不規則で) アクセント符号がつき、その音節

調べたサンプルの教科書では、ほとんどが (4) 3. で、「例外として」「1.2. でない場合」、「これ以外」、「上記以外」、「不規則な場合」というような断り書きと共に、このケースを付則的に最後に提示している。

しかし、きちんと整理をすれば、3. に該当する事例は、1.2. の”それ以外 (elsewhere)”、という意味ではないことがわかる。始めの2則がいわば通則を表現しているのに対して、3は第1優先順位で適用されなければならない超規性を伴う。1. と2. に該当していながらも3. にも適合する語も存在し、その場合は、3. をまず先に考慮しなければならない。このように、(4) のルール建て方にも少なからぬ疑問があるのだが、それはさておき、それよりもここで最も重要な問題として提起したいのは、アクセントの位置に関する規則で、なぜ『音節』に言及しなければならないかという点である。

もともと音節という用語が導入され学習者に示されるのは、この段階でアクセント位置を説明するのに必要であったためだが、上記で見たような音節は本当にアクセントの理解に不可欠でまた有効なのだろうか、という視点から両者の依存関係をもう少し詳しく次項で見てみよう。

1.4. アクセントと音節の関係

音節の実体はよく解明されていないと思われる。あるいは、解明されているのかも知れないが、とにかく筆者個人はこれを十分に理解するに至っていない。だが、このテーマを特に最新の先端的研究の成果を交えて、入門スペイン語の生徒に対して啓蒙すべきとも考えられない。ただし、音節という単位を音に関する何らかの現象の説明に利用する際に、(5) のような複数の顔をもつ概念であり、一般にそのいずれかの側面に注目しながら利用されている事実を考慮するべきであろう。

- (5) i) 線分風音節（区間型）
音節境界から次の音節境界までの区間
- ii) 谷状音節（境界型）
異音節へ・からの推移点；峰や峰の向こう側は見えない
- iii) 山並み音節（核音型）
音節の核の数、核音の位置；谷の位置・様子は見えない

言うまでもなく、入門テキストで触れられ、実践される「音節」のイメージは (5) i) の区間型である。また、実際、大多数のスペイン語教師も音節に対してこの種の把握の仕方をしているのではないかと想像される。ii) は主に、歴史的音韻変化や、音韻プロセス・形態音韻交替での環境条件で言及される「音節」である。これらに加えて、音節の境界はむしろ irrelevant で、集塊単位の並びを重視する音節観 iii) も存在する。中核となる要素とそれらの配列が問題なのであって、各分割小単位の構造や境界線の厳密な線引きを無視する見方である。もちろん、この3タイプを折衷した中間的な捉え方もあるだろうが、意外に考慮されていないと思うのは、最後に見た「山並み」風にグローバルに俯瞰される塊（かたまり）単位としての音節である。

他方、スペイン語アクセントの音声的実体に関しても不明なところが多い。しかし我々はアクセントを知覚し識別しているつもりだし、また我々がアクセントと信じているもので何となく native speaker もそれを識別しているように思う。アクセントの正確な実質を把握しなくても、単語の中の強く目立つ、引き立たせる部分というおおざっぱな説明で教育的な目的を達せられると仮定できる。

ところで、アクセントと音節の関係についてはどうだろうか。教育現場に限らず、スペイン語音韻論・音声学においても、音節がアクセントの受け手であるという認識は広く承認されているように見える。けれども、アクセントが特定の音節に存在すると教える際に、そのことが正確にはどのようなことを意味しているのか問い直す必要があると考える。伝統的な指導法はすべて、『アクセントを担う要素は音節である』という仮定に立っている。仮に、『アクセント(強勢)を担える要素は「音節」である』という主張が正しいと認めても、同時に (6) の成立を保証するものではない。

(6) 「アクセントを担う要素」と「アクセント(の位置)を数える要素」は同じである

これまでの教科書で採用されてきた方針は (6) を当然のこととして不問にしている。しかし、この部分は枢要なポイントである。前者が明確にされない（明確にできない性質を持つ）ならば、また、たとえ、明確になったとしても、その同定に複雑な手続きが必要であれば、教育目的には、後者を分離するべきではないか、と考える。もう少し正確に言えば、「アクセントを担える（担う可能性をもつ）要素の数が一定数存在し、それが音韻論上の音節（recursive な配列単位）の数と一致するという事実から、両者の範囲がぴったりと重なり合うという結

論は出て来ないのである。後者が「アクセントを数える要素」と直結するとはなおさら思われぬ。

仮に、『アクセントを担う要素は音節である』という主張を受け入れたとしても、その実際の要素は次の何と同定されるかという疑問が生じる。

(7) 『アクセントを担う要素』

- a. 音節を構成するすべてのセグメント
- b. 音節内の特定部分要素：rima、mora、音節の核、音節主音

音節が区切られることによって、境界線を引かれることによって成立することを実際に体験した学習者は、音節の境界（区切りの境目）を重視し、境界から境界までの区間を音節と考えるのが自然で、(7) a. の解釈に傾くだろう。〈アクセントが特定の音節にある〉という断定に接すれば、アクセントという音韻的あるいは韻律的特徴がどんなものであれ、その特徴が境界から境界まで均一に分布すると解釈するにちがいない。

(5) iii のような「山並み」的な音節概念も存在することが別途に説明されないとすると、学習者は (8) の発音で、強勢は第2音節の TA（大文字太字部分だけ）に均等に広がっていると想像しているはずである。

(8) pa \$ TA \$ ta

実際、上で引用した参照テキスト18点では、ほとんどすべてがアクセントのある部分とそうでない部分とを明示的に対照している。アクセントを担う部分、つまり音節全体がボールド体で印刷されたり、下線を付されたりして、何らかの強調表示がなされている [cf. (9)]。正確にこの部分に対して強勢を置くように学習者に意識させようと配慮されていることがわかる。こうすることによって、これらの教科書はアクセントが音節全体のセグメントに関わることを、つまり (7a) の解釈を行うよう学習者に対して念を押している。

(9) patata pa-**TA**-ta pa/ta/ta

しかし、弁別的特徴としての強勢の持続範囲が‘TA’の調音の時間的広がり（大文字部分）と一致しているという客観的証拠が確認されたのだろうか？ その内部の一部に重なり得るのは確実だろうが、特定の部分的広がりとは一致するという分析データは未見である。

アクセントが、syntagmatic な取り扱いをされ、隣接の非アクセント音節との関係で見直され、自立した韻律界層に位置づけられるアプローチが主流になったのはそれなりの根拠があるが、（大文字の）TA、（小文字の）taのようにそれぞれの音節の全セグメントに等しくアクセント特徴が確然と存在する、あるいは存在しないという理論的な主張がなされているわけではないはずである。従って、このような音節界層を認める分析はアクセント位置の規定に

音節の厳密な境界画定を前提してはいない。例えば、少なくともスペイン語で、pa という音節が強勢音節であるか、無強勢音節であるかによって onset の子音 p やその他の音節内の各分節音が顕著な特性をもって組織的に対立するということは認められていない。

さらに百歩譲って、「強勢」というある種の特徴が、左の音節境界の直後から右の音節境界の直前まで持続するという音声音響学的事実が証明されたとしても、実用レベルの発音を修得する際にこれを反映して正確な音節境界を心得ていなければならないということの根拠にならない。



アクセントのある音節が、仮に (10) の図式モデルで描いたような、何らかの顕著な継続的特性を持つものとする。これらは、アクセントの中身の如何に関わらず（言い換えれば、a. b. c. d. のいずれを呈しても、その他の曲線であっても構わないが）、アクセントの開始点とその終息点を知覚出来ると言うことを主張している。果たしてスペイン語の話し手はそのような差を認識するのだろうか？

さて、(11) は単語 *patata* の4種類の(仮想的)音声実現を表したものである。

- (11) 1. pa TA ta 2. pa tA ta 3. pa tA Ta 4. pa TA Ta

大文字表記の部分に強勢が懸かるとして、スペイン語話者たちはこれらの音声実現の違いを区別できるのだろうか？ 今のところ、彼らがこのような能力を有するという報告を見ていないし、また非 native の日本人で、このような強勢範囲の差を実現し聞き取れるという人にも出会わない。

アクセントが音節の一部でなく、音節全体に分布するという (7) a. 説がもし正しいのであれば、一番左の (11) 1. 以外の発音を識別して排除できなければならない。2. や3. と4. を対立的にとらえることが出来ずその実現を意図的にも区別不可能なのであれば、アクセントが線分的な音節に存在するという主張を覆す間接的な証拠となる。これに関連してもう一つ興味深い事実に気づく。

最近の本格的な西語対訳辞典はいずれも見出し語に音声記号による発音情報載せるのが普通である。もし、アクセントの分布が音節と一致するのが本来あるべき正しい姿であるのなら、その規範的性格からして精密な標記が採用されるべきである。すなわち、

- (12) a. [patáta] b. [pa'táta] c. [pa-ta-ta]

(12) b. または c. あるいは何らかの方法で強勢が ta 全体に及ぶことを示さなければならない。ところが、我が国の3種類の主要な辞書³⁾はいずれも (12) a. の発音を掲げており、アクセントは母音の上に落ちると示されている。便宜的にカナ文字での発音を付記している辞

書でも、強勢の音節全体のカナをボールド体で区別するのではなく、音節核の母音を含むカナに相当する部分だけが太字体で印刷されているのがわかる。このような慣行はアクセントが音節の領域と重なることを暗黙裡に否定しているとも受け取れる。

各教科書にも示されているように、教室では、アクセントは音節全体にあると教えられているにもかかわらず、一方、辞書では、すべての強勢を持つ語のアクセントは母音にあるように示されているのを見て、学習者は戸惑いや矛盾を感じないだろうか？

以上の諸点から、アクセントを実用的な教育目的で教えるケースに限らずに、一般に音節を上記 (5) iii) の山並みのように考え、アクセントを配置できる位置を数えるための識別点として「音節核音」に注目することの方が合理的でかつ妥当だという結論に至る。もちろん、音節核音を critical な要素と見なすという意味合いで重視するのであって、明らかにこの母音の継続時間がすなわちアクセントの持続時間だと断定するのではない。

つまり、アクセント(強勢)を担える要素は「音節内のすべてのセグメントや特定の一部の要素」であると厳密に理解することはできないし、する必要もない。線分メージの音節観を植え付ける伝統的な分節法によって得られた音節は、むしろ (10) のアクセントを想定する。従って、(3) (4) の指導をするのを避けるのは、単に学習者の負担を軽減して、学習効果を上げやすくするだけでなく、言語音とアクセントの関係について誤った観念を防止するといった利点もあると思う。

1.5. 完全分節は必要か

従来の音節及びアクセント教育では、1つの単語を完全に分節してから、具体的には単語の第1音節から語尾に向けて進み、全音節を確定した後で、アクセントの位置を知るという手続きが踏まれている。アクセントを指導するためにのみ「音節」を導入するという目的から判断すれば、これは余剰的である。強勢位置は語尾の方から前方へスキャンされ、最終音節または終わりから第2音節か第3音節目で発見されればそれで十分である。多音節語については、行う必要もない先の分節を行なっていることになる。もし学習者がこの通り実践しているとすれば、かなりの無駄を含んでいるはずである。

1.6. 未習項目の無統制先取り

さらに、(1) の方式では、アクセントと各音の発音法の関係だけでなく一般に、未習・後出の項目が随時に先取りされて使われるといった提示順序の転倒や矛盾が頻出するのも特色である。

冒頭の (1) のメニューで、字母表を除きすべての項目で「単語の例示」部分があるのに気がつく。各 unit の段階で、多かれ少なかれ、実際のスペイン語単語が聞かされたり、発音の練習が促されているのは当然とも言える。例えば、unit 2a で子音の発音を指導するとき、各子音文字のみを取り出して、その音価を解説したり、あるいは実際に学習者に聞かせる教師はほとんど皆無だろう。実際、テキストではこの段階に多数のスペイン語の単語が例示されて、教師側も発音するし、学生もそれをまねて発音してみることが期待されている。一方、

母音や二重母音の実例提示のためにも単語が示されるが、そこに含まれる子音の発音が未習であるのに、それらが無秩序に先取りされるのが当たり前のようにになっている。

とりわけ、このように多数の単語に晒されその発音に全神経を注意を傾注するように指導されながら、このとき学習者はアクセントとその位置については何の知識も与えられていないチグハグな事態が生じるのは深刻である。

このような不統制と混乱が起こるのは、アクセントの位置についての説明が、一番最後に置かれているためである。なぜ、最も後回しになるかということ、アクセントは音節に依存しており、音節の定義や音節への分節が終わってからでないと、取り上げられないからである。一方、音節と分節法は、すべての母音、二重母音、子音、二重子音の解説を済ませてからでないと提示することができないから、(I)の標準メニューのように、やはり終わり近くでないと取り上げることができない、という循環的矛盾に陥いる。

そこで、これらの矛盾を解決するために、(1) + (2) + (3) + (4) に代わるものとして、IIの再編成案を提案して見たい。

II. 別案

2.1.

(13) <文字と発音>

unit 1. 母音の発音

a e o ; i u (i, u は母音の直前・直後で半母音になる)

[ai, au, ei, eu, etc. の組み合わせ]⁹⁾

unit 2. アクセントの位置

i) アクセント符号が付けられた語は、その母音

ii) ・母音か n, s で終る語 ⇒ 最後から 2 番目の母音

・ n, s 以外の子音字で終る語 ⇒ 最後の母音

unit 3. 各子音の発音： 単語の例示 (ay, ey, etc. を含む)

unit 1 は 5 つの母音文字とその音価に対する簡単な解説を含む。各音を聞き取らせ発音するだけで十分である。i を除いてそれぞれが単語の綴りでもあり得るが、ここは文字と音の関係として提示する。旧来の教授法と異なる点は、ここに例語を示さない他、強母音（開母音）・弱母音（閉母音）のような分類用語を導入しない点にある。

オプションとして、二重母音・三重母音の組み合わせをリストアップしてもよいが、これらを暗記するための項目にはしない。また、非重母音、分立のケースと区別して、その相違をことさら強調し、理解して記憶するよう強制するのをむしろ避ける。二重母音・三重母音の用語は使わない。また、これらを含んだ単語の具体例はここでは提示しない。

半母音という概念・用語が新たに必要だが、“i, u は母音の直前・直後で半母音になる”というだけのわかりやすい定義なので学習者の負担は軽い。伝統的な発音解説でも、どのみち

述べられなければならない、iu, ui に関しては、主に2番目の文字が母音として発音される傾向が強いことを口頭で注釈するくらいでよいであろう。

アクセント位置 (unit 2) のプレゼンテーションは、どのようにアクセント符号が利用されるのかの ortografía の基準を明らかにするよりは、初級者に対しては、書き表された単語綴りに対してどのようにして強勢位置を発見するか、という実用目的に徹する方が効率的である。前述のように『アクセントは (4) 1.2.3 のいずれかの場合がある』というのは正確でない。unit 2 i) が最優先で(無条件で)適用されなければならない基準である。逆に見れば、これに該当している単語はすべてが ii) に相当しないわけではない。例えば、ii) に該当しながらも、アクセント符号を持つ語も存在する【cuándo, té; bíceps, fórceps, etc.】からである。論理的には「アクセント符号を持つ語は、その位置に強勢を置け」という第1原則が先ず存在し、ついで、ii) の二つの相補的下位規則が適用されるよう順序づけられた関係にある。

(13)で示した別案では、単語の例示が子音解説の時点で始めて行われるのに注目されたい。もちろん、子音だけの語は存在しないので、必要なら母音に関する追加説明を含めて、母音の発音実習がここでも平行してなされるのは言うまでもない。

2.2. 新方式の特色

前項のシラバスは、一方で、本稿で指摘した様々な問題を解決するほか、他にも多くの利点を含んでいると信じる。入門スペイン語の冒頭部の発音解説として、これまで筆者自身が担当したクラスでかなりの実践(具体的なテキストとしては下記のものほぼ、この別案方式を採用している)を経たものであり、経験上、特に不都合をもたらす部分はないことを確認している。

★大阪外国語大学イスパニア語研究室編『Curso de Español: Gramática-Lectura』、1980 (公開講座 スペイン語72時間コース教材)

★出口厚実・長谷川信弥『アデランテ』第三書房、1997

その特長と、導入のためのコストを比較して箇条書きにまとめたのが次の (14) (15) である:

(14) 特長

- ・用語「二重子音」・「強母音、弱母音、二重母音、三重母音」の不使用
- ・強弱、弱弱、弱強 etc. のパターンあるいは十数種類の二・三重母音の組み合わせ形式の暗記が不要になる
- ・二重子音の12種の組み合わせを暗記する必要がない
- ・「音節」の定義、分節手続きの修得が不要
- ・文字 x の異例な、音声レベルでの分割 k-s を避けられる
- ・sub/rayar, sub/lunar, sub/repticio などの例外的分節に対する考慮が不要
- ・アクセントの位置を知るための手続きが簡単で、覚えやすくなる
- ・アクセントを早期に説明できるため、母音・子音の発音説明における単語の聞き取り

や練習調音をアクセントの位置を意識して行うことができ、アクセントパターンの修得に有効である

- ・未習事項の先行出現など unit 間の提示順序の不統制、矛盾を避けることができる

(15) 導入コスト

- ・半母音とその定義
- ・単語の分綴（ハイフンによる分割）法⁹⁾を学ぶ必要のある者は、そのときに分綴の方法を新たに修得しなければならない

2.3. 終わりに

音節の概念はアクセント位置決定のために不可欠なものとして、あるいは消極的に「避けられないもの」として、入門スペイン語授業の冒頭部で教えられるのが普通である。もし習慣的に行われている(3)の分綴手続きを行わなくても、簡単に単語アクセントの位置を知る別の方法があるのならば、音節はスペイン語の発音指導の上で基本となる重要事項の1つだという主張は根拠を失う。

この報告では、さらに一歩進めて、「二重子音」「分綴」「音節依存のアクセント規則」の概念自体に疑惑があり、一般に信じられているほどの自明の論拠を持たないことも示した。むしろ、入門初期のスペイン語教育にこれらを漫然と持ち込むことの方に弊害があり、それらを利用しない(13)のメニューを提案するものである。言い換えれば、これらの3概念を教室に持ち込まない教授方式が学習者の負担を減少させるという効率上の理由だけでなく、積極的に代替手段を正当化する根拠があることを示唆した。

以上のような諸点が初級スペイン語の学習にどの程度の負担の軽減になるかは、客観的に測定しにくいですが、入門後間もない学習者には、難しそうだとか、覚えにくそうだという不安感や威圧感を極力与えないようにするのがより望ましい。スペイン語教育の中で音節をきわめて重視する考え方がある。実際、「スペイン語学習で最も大切・重要なことは？」と尋ねられれば、ためらわず「音節を知り尽くすこと」と答える、と断言されている教育者もある。拙論の考え方は、その対極に位置していて、手っ取り早く言えば、初級のスペイン語教育で音節や音節への分綴を教えることは不必要である、という主張をしていると受け取られてもかまわない。

[注]

*本稿は、SELE'99 (1999年8月26日-28日於：愛知県労働者研修センター)において筆者が報告した研究発表『入門スペイン語教育における「音節」について』に基づいている。出席者からいただいた多くのコメントや指摘に対して感謝するとともに、その場での説明・答弁が不足したと考えられる部分は可能な限り補足・加筆して対応するよう心がけたつもりである。

1) 参考教材用テキスト一覧：

(1993年以降に初版が出版されたテキストで、審査用見本として出版社から提供を受けたもので発音解説を含むものすべて)

青木文夫・辻光博 『現代スペイン語：文法と表現』 芸林書房、1993

- 小林一宏・エデルミラ アマート 『スペイン語との出会い』 第三書房、1993
 細川幸夫 『英語からスペイン語へ』 芸林書房、1993
 野間一正・安藤弥生 『やさしいスペイン文法読本』 第三書房、1994
 浅香武和 『新スペイン語文法』 大学書林、1995
 西川喬 『スペイン語ゼミナール』 第三書房、1995
 大林文彦・藤田一成・大田強正・ホセ ミリヤン 『現代標準スペイン語』 第三書房、1995
 飯野昭夫 『第2語学のスペイン語』 第三書房、1996
 霞洋子・佐藤勘治・高松朋子・J. L. ベラスコ 『オラ・アミーゴス』 芸林書房、1996
 小池和良・上野勝広 『スペイン語を学びましょう』 朝日出版社、1996
 山口忠志 『スペイン語で始めよう』 第三書房、1996
 Javier Llano・上田博人・Inmaculada Martínez 『初級スペイン語』 朝日出版社、1997
 カルメン パボン・角田哲康・木下登 『メディア・ナランハ』 大学書林、1997
 佐々木克実 『スペイン語との出会い』 芸林書房、1997
 大岩勉・カルメン パボン・高橋覚二 『初めて学ぶスペイン語』 第三書房、1998
 福嶋教隆 『コミュニケーションのためのスペイン語』 芸林書房、1999
 ギジェルモ吉川・瀬上英二 『わかるスペイン語入門』 芸林書房、1999
 M. Lourdes Doménech・M. Dolores Doménech・J. Ignacio Doménech・土居信 『自然に身につくスペイン語』 芸林書房、1999

- 2) 調査対象クラス：大阪外国語大学スペイン語専攻2年次2クラス（昼間主コース19名、夜間主コース25名）；実施時期1999年7月

”母音間二重子音を含む語”の選択基準は、現代語として遭遇する可能性の多い通常の一般的な語を選ぶため、スペインの雑誌 La Revista de El Mundo (電子版)の1999年7月の4週分テキストの総語彙の中から頻度数5以上で、前記条件に適する以下のものを抽出した：

aplicación, supremo, población, fábrica, ciclo, sacrificio, siglo, fotografía, refleja, sufrir, otro, catedral
 調査表には、二重子音でない2子音連続を含む語もランダムに並べておき、調査意図が感知されないように配慮した。これらの回答率は、二重子音の箇所の分割についてのみ注目しているため、該当単語全体の分節が正しく行われているかどうかは調べていない。その場合、正答率はさらに低下するはずである。なお、正答率の最も高い語、低い語は、それぞれ fotografía 100%, sufrir 34%であった。

- 3) 桑名一博他編『小学館西和中辞典』、小学館、1990
 カルロス・ルビオ、上田博人編『新スペイン語辞典』、研究社、1992
 宮城昇・山田善郎監修『現代スペイン語辞典』(改訂版)、白水社、1999

- 4) 例えば、随意的に次のようなリストを発音練習用に示すことができる。

ai au ei eu oi
 ia ua ie ue io uo
 iu ui
 iai iei (uai uei)

- 5) 入門教科書よりも詳細な学習参考書や中級者向けの参照文法書などで、時折、見受けられるのが、分節(音節への分割)とハイフン分綴(行末での単語の分断)との混同である。もしも、「音節」が発音入門でもどうしても教えられべきのものと認められたとしても、それは、あくまでも音韻的な小単位への再分割という意味合いであって、入門コースの初期の段階で、形態素の境界を考慮する、いわゆる「分綴」を一緒に扱って指導すべきとは思われない。行替えのための単語の分綴がどのようになされるべきかは多分に規範的な性格を加味した慣習的なもので、教育上どの程度重要性を持つのか疑問である。仮にそれが総合的な「スペイン語教科」のシラバスに入るとしても、ずっと後の段階の指導項目であろうと思われるのでここでは論じない。

(1999.09.30)

(1999.10.4 受理)